

十二月二日 日曜日

ベアシーで菅原のライカコレクションに再会した為か、朝フト思い立ってライカを一階の廃屋から引っぱり出してきた。我ながら他愛ない。このライカはリアス会の佐々木所長から以前もらったもので、何だかイイものらしいのだが私はライカ狂ではないから、そのいはれは知らない。レンズ部分をグイと引き出さぬと働かぬ奴で、菅原の話では確かライカの名器の誉れ高いM3と呼ばれる一つ前のものらしい。グイと引き出すレンズのシャフト状の部分は手作りに近いものだど講釈された事を思い出す。電子部品が何処にも仕込まれていない安心感がある。小型機械が到達することができた水準が体現されている。何年か前に一度使おうとしたのだが、フィルムの入れ方が難しく失敗してしまい、一枚も写っていないかった。それ以来引き出しにしまい込んで忘れていた。今使っているコンタックスはほとんど何もしなくても良い。電池がなくなると、ただの軽合金の固まりになってしまうことを除けば誠に便利このうえない。その前に使っていたニコンF4は重かった。それに色んな仕掛けがあり過ぎて使い切れなかった。コンタックスはただただ便利なのが良かった。それにズーム部分だけは手動で、そこにささやかなうれしさがあった。カメラに使われているのではなく、カメラを使っているのだという何だか妙なみみっちうれしさだ。引っぱり出したライカは何から何まで人間が操作しなければならぬ。フィルム入れてきちっとセットす

るのに五分位かかってしまう。それから絞りを決めて、シャッタースピードを決め、距離を合わせ、ファインダーが二つあって構図とピントをそれぞれ合わせ、やっとシャッターが切れると言う代物だ。慣れぬと一枚の写真を撮るのに一分ぐらいかかってしまう。そしてシャッター切っても、ちゃんとフィルムが巻かれているか、フィルム巻きあげの丸いボタン状のつまみを廻していても、その保証は何処にもない。事実、前回は巻きあがってなかった。人間の手と機械がきちんと関係しないと働かない。

机の上に松崎町で買った富士の使い捨てカメラ、写ルンデスの新タイプがある。これなんかはシャッター押して、そのまんま写真屋へ出せば良いだけのモノだ。フィルム屋にドレイのように使われているみたい。カメラはフィルムのおまけになっている。これからはますます人間はシステムに使われていく時代になるのだろう。何かを見て記録したい、記憶しておきたいという想いを満たすための道具がカメラであろう。スケッチするのが私には一番だろうが、これはエネルギーが要る。出来るだけスケッチしたいが、カメラも必要だ。それくらいのカメラだったらライカで良いのかも知れない。写っているかどうか不安なくらいのカメラで良いのかも知れない。

このライカに少し慣れてみようかな。

佐藤健ウルムチ、カシユガルより帰る。無事で何よりだった。来春の敦煌、莫高窟の旅もどうやら春のワークショッップのスケジュールとバッテリーングしてしまいそうだ。最期の朝鮮半島の旅だけ同行することになりそうだ。春の朝鮮半島もいだろう。朝鮮が一番近くて、一番遠い国だから一度ゆっくり勉強したいと思っていた。